『椨の木』二〇〇三年刊

羂索のかすれし釣瓶落しかな
十界図いづこも虫の声ひびく
冬の日や野の真中をくすぐる子
あとは咲けと老桜なる笑み力
鬼の棲む高嶺誇りに花ふぶく
まん中に夷ゐさうな青田波
亜路（あてるゐ）王の首に無辺や旱星
大暑なる猩々舞に酒壺いくつ
残菊や雲を容れたる立石寺
身にふかき鬼に及びし湯ざめかな
二十一世紀春の沖までパパゲーノ
地下茎のくすぐる戦意世紀越ゆ
もののけもけものも無礼福寿草
わが耳を打ち寒立馬たたく雪

身の底の大渦潮のきざしかな

滝桜落ちくるひかり子へ流す

台風の目や妖(あや)かしも肝つぶす

中年の孤心もうせんごけ燥ぐ

巻添へ死寒し首一つ取るために

春帽子あかつきならば翔ちさうな

割れごゑの桜や闇を吸ひ上げて

空振りの隙間のひかる大暑かな

盆さまと言ふくちびるのうすかげり

たましひの渦曳く秋の神輿かな

お化けの面越しに人見る秋暑かな

がうがうと首を落ちゆく天の川

こがらしや血管の中明るくて

青あらし翁の舟をかげおくり

暑き日やかならず波をかぶる石

ひとめぐり流れてきたり天の川